考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.179
2018.8.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

心に残る先学の人生記録 ―読書日記から―

大村 裕

第５回

江馬修（なかし）『一作家の歩み』（理論社 1957年）と天児直美（あまこ）『炎の燃えつきる時 −江馬修の生涯−』（春秋社 1985年）（その2）

江馬が文壇で頭角を現し、世間に認められた契機は、長編小説『受難者』（1916年刊）の好評であった。以後見知らぬ人からのファンレターは数知れず、女性たちの不意の訪問もかなりあり、誘惑も次々にあったらしい。江馬は既に結婚していたので、そうした「美しい誘惑者」たちとの関係ついて控えめ目に告白しているが、天児直美（晩年の恋人）は、江馬が「次々と女性に溺れ、放蕩な生活を続けていった」と書いている。肝心の仕事の方は、菊池寛を始めとする「大衆文学」が台頭し、一方で小林多喜二や徳永直らのプロレタリア作家がインテリ層に歓迎され始めると、自然主義文学や江馬のような「人道主義文学」は劣勢に立たされ、江馬の本も売れ行きが鈍くなって行く。また一時の成功に有頂天となったのか、傲慢になって多くの敵を作り、あまつさえ女性問題で信用を落として孤立していったという。折柄関東大震災に見舞われ、この災害に乗じた国家権力による社会主義者や「朝鮮人」に対する虐殺を見聞きしたことが引き金となって、社会主義に目覚める。日本共産党員と交流が始まり、自宅は彼らの「アジト」として利用される。マルクス経済学者の河上肇とも交流が始まり、大阪で開催された講演会の弁士を共につとめている（なお後年、河上に師事して『資本論』を本格的に学習したという）。結果、当局に「要注意人物」としてマークされ、1929年9月にはとうとう特高に襲われて青山署に連行され、40日程拘留される憂き目にあうのである。こうした八方ふさがりの中で、彼は民衆を主人公とした本格的な歴史小説（『山の民』）を執筆することを思い立つ。すなわち、郷土飛騨高山において明治維新期に起きた大衆蜂起「梅村騒動」を題材に取り、「人民大衆の力が歴史の基本的な推進力として最も力強く作用している」ことを示そうというのである。江馬は既に最初の妻くめと離婚し、彼の小説のファンの一人であった富田ミサホ（後、「江馬三枝子」と称する）と再婚していたのであるが、妻子（子供はくめとの間の子）を連れて高山に移住し、ここで腰を落ち着けて地道な取材活動を始める。この高山移住が江馬を考古学や民俗学に結びつけることとなるのである。

『山の民』は、農民たちを主人公とした壮大なスケールで描かれた歴史小説である。大岡昇平は、北溟社版『山の民』（1973年刊）の解説で、「歴史の把握において」『夜明け前』の作者島崎藤村とは「比べものにならぬ堅固さを持っている」と評し、その叙述の規模においても『夜明け前』に「まさっている」と絶賛している。飛騨の美しくも苛酷な自然を生き生きと描写し、山村農民の凄まじい生活状況を克明に紹介しているが、よくぞここまで調べたものだという印象を持つ（有毒な「ホヤ」という寄生植物を、それと知っていながら食べずには居られない山村農民の実態に言及するなどは、都会にとどまり、書物だけを頼りに執筆する作家には到底出来ない芸当である）。その背景について天児直美は、春秋社版『山の民』（1985年刊）の「後記」において、江馬が主宰した「飛騨考古土俗学会」とその機関誌『ひだびと』（民俗・考古学を中心とした郷土研究誌）に蓄積された研究成果が、『山の民』の基盤となっていたのではないかと的確に指摘している。ちなみに江馬自身は、飛騨において考古学・民俗学・郷土史の調査を進める傍ら、「梅村騒動」の参加者や目撃者をたずね、詳しい聞き書きをとっている。私は、この本を随分以前に読んだのであるが、未だにその印象が強いのは、そうした生（なま）の資料の迫力によるものであろう。なお、私が江馬修に強い興味を抱いたのは、天児（1985）を読んでからであった。『山の民』を執筆するために東京の自宅を売り払って資金を調達し、家族ぐるみで飛騨に転居（1932年）してから、一時の断絶を挟んで1950年までここにとどまり、この間『山の民』を上梓したことを知った。そして天児（1985）の扉に掲げられた、次のような江馬の言葉に強い共感を覚えたのである。

「かりにも、真の作家の名に値する作家になろうと志す以上、その人はかならずや、異常なる忍耐と労苦の長年月の生活を経験しなければならず、それに打ち克つのはなまやさしいことではない。この覚悟と実行力のあるものだけが、真の作家の栄誉ある名を受けることができるのだ」

まさに『山の民』を描き切った江馬の心中（しんちゅう）を述べたものといえよう。さらに天児（1985）の本文中にある、「我々の時代は、作家になるということは、生涯食うや食わずのどん底生活は覚悟の上で、ただやみがたい創作への意欲だけがそれを決意させたのであり、今の若い人たちとはまるで出発点が違っている」という江馬の言葉も強く心に響いた。昔の多くの在野考古学徒も、こうした意気込みで研究活動を続けてきたのであり、それを範として私自身も考古学研究に微力を尽くしてきたので、江馬の生き方に尊敬の念を強くしたのであった。

江馬には、今まで記して来たような多くの人間的な欠陥がある。しかし一部の江馬を知るものたちは、その純粋さ、困難をものともしない粘り強さ、利害を度外視して創作活動に突き進む熱情など、常人にはとてもおよびもつかない人格に強く惹かれているのである。晩年の江馬は天児直美に暴力をふるい、ひどい暴言を吐き、我儘放題に向き合ったが、それでも彼を見捨てず、母親や弟妹を巻き込んで世話をし続けたのは、この美点があったからであろう。江馬と生活を共にした女性たちは皆素敵な人々である。しかも江馬を見限って自発的に去っていった女性は一人もいない。現代の「赤ひげ」のような主治医の君島善次郎は、『山の民』を再刊するために出版社（北溟社）を立ち上げ、本の販売のために看護師らも動員して活躍している。晩年は貧窮と孤独の中で一生を終えたが、少ないながらも江馬を高く評価する人々に囲まれ、幸福な人生であったといえるかも知れない。

（この稿続く　なお本稿執筆に当たり、旧友・佐久間達氏より資料提供を受けた）

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■心に残る先学の人生記録 ―読書日記から―（第5回）　大村 裕 …1
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえます（第2回）　井川史子 …2
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト（第172回）　山根謙二 …3
■考古学者の書棚 「文化財保存科学ノート」　大本朋弥 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえます（第2回）

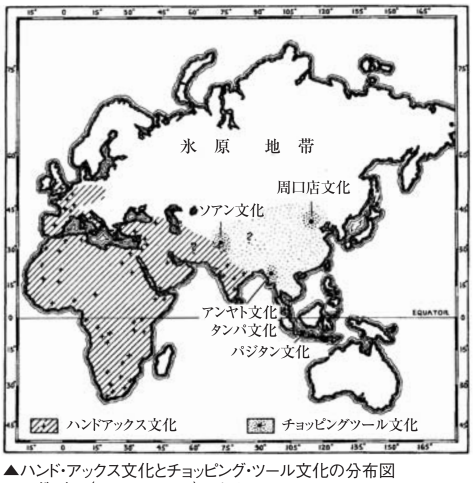
Fumiko Ikawa-Smith（井川史子）

2. 日本旧石器研究との接点

アメリカでの院生生活の2年目を終えた1957年の夏は、昨年のメキシコ高文化遺跡と対照的な狩猟採集民の遺跡の発掘を経験することになった。それはカナダのブリティッシュ・コロンビア州のロッキー山脈内の水源から、アメリカのワシントン州、オレゴン州を経て太平洋に注ぐコロンビア河の中流地点にあるプリースト・ラピッズに1955年から1960年にかけて建造されたダムによって水没・破壊される考古遺跡を発掘調査するプロジェクトに参加したからだ。コロンビア河はこのあたりで川幅が狭くなっていて、サーモン漁に絶好の地点だったので、先史時代から最近まで原住民が狩猟採集生活を営んだ痕跡が多数残っている。プリースト・ラピッズ・プロジェクトの担当者は、その年1957年に博士課程を終了して、シアトル市のワシントン大学に就職されるハーヴァード大学院の先輩ロバート・グリンゴー博士で、ワシントン大学の学生に当地付近の高校生などを交えた20名ばかりの作業員に私どもハーヴァードの後輩数名が加った。

ハーヴァードから参加した仲間でその後も親しくさせて頂いた考古学者としては、後にカナダのアルバータ大学の教授となったアラン・ブライアンや、当時、ハーヴァードの女子部ラドクリフ大学の学部生で、後にブライアンと結婚して、同じくアルバータ大学の教授になったルース・グルーエンがいた。新大陸へ最初に渡来したのはBC11,000年頃に北米全土にクロヴィス型尖頭器をひろめた人たちだというのが通論だったが、ブライアンとグルーエンはそれよりずっと遡るという少数派の立場を固持していて、その証拠を求めて、北米西部から中・南米各地で多数の遺跡を精力的に発掘調査している。ブライアンは2010年に亡くなるまでに、新大陸の先史時代に関するシンポジュウムや論文集をいくつか主催している。太平洋の向こう側の日本列島にはどのような石器群がいつ頃あったかということは新大陸への人類拡散に関係があるので、私もブライアンに招かれて彼の企画したシンポジュウムに参加し、論文集に投稿したことがある。

このように、私はここ数十年間、日本の旧石器考古学を専攻するものとして北米の学界で扱われることになったが、今から思えば、その起点は、プリースト・ラピッズ発掘に先立つ1957年の春学期の単位登録に求められるとおもわれる。ハーヴァードの修士課程では4科目に登録するのが規定だったが、私の時間表にうまくはまる科目がどうしてもひとつ足りない。どうしたものだろうと思案していたら、そういう場合は、個人指導による特殊購読で埋めればよい、アジア考古学で有名なハラム・モヴィウス　博士にお願いしてみては、と友人に勧められた。モヴィウス先生は1940年代に東アジア・東南アジアの前・中期旧石器文化はアフリカやヨーロッパの同時代の文化とは性格が異なることを指摘されたことで有名な考古学者だが、ハーヴァード内部では気難しいことでも有名な先生だった。それで先生の研究室に恐る恐る参上して、購読コースの指導をお願いしたところ、意外にも快く承知してくださった。今から考えると、モヴィウス博士にとっても好都合なタイミングだったのではないかと思う。



▲ハンド・アックス文化とチョッピング・ツール文化の分布図
モヴィウス（1949, p.409）による
Hallam L. Movius. “The Lower Palaeolithic cultures of southern and eastern Asia “, *Transactions of the American Philisophical Society, N.S. Vol. 38, Part 4. 1949.*

1949年の岩宿遺跡発掘によって日本列島にも縄文文化より古い人類遺跡があることが明らかになると、更新世の地層を包含層とする遺跡が各地で発見・調査された。東アジア旧石器文化研究の第一人者とされていたモヴィウス博士のところへは、1956年に出版された岩宿遺跡の報告書、同じく1956年出版の樽岸遺跡の報告書をはじめとして、多数の発掘報告、論文、概説などがおくられてきていたが、日本語の本文に英語の要旨がついている程度で、日本語の読めない人には内容はよくわからない。欧文のものとしてはミシガン大学のビアズレー博士がアメリカのアジア学会（Asian Studies Association）の機関紙、Far Eastern Quarterly（現在名はThe Journal of Asian Studies）に1955年に発表した、“Japan before history: A survey of the Archaeological records”（考古学からみた日本の先史時代）と題した論文があるが、約30頁の力作の冒頭2頁ほどを先縄文文化にあて、岩宿その他各地で遺物が最近見つかっているから、縄文時代以前の日本列島に人類が到来した痕跡を追う熱が高まることだろうという予想論にとどまっている。遺跡・遺物を詳しく考察したものとしては、南山大学教授で、市川市の考古学研究所の所長をしていたヨハネス・マーリンガー博士が権現山と岩宿の遺物群を国外の旧石器文化の遺物と比較した論考を英文と独文で3点ずつ、計6点を1956-1957年に発表している。一方、これより前の1954年に国際基督教大学のJ.エドワード・キダー博士が岩宿、藪塚、殿ヶ谷戸、熊の郷、茂呂、茶臼山などから出土したといわれる“先縄文文化”の石器は縄文時代の遺物が二次堆積したものではなかろうかといった懐疑論を提出しているので、欧文の資料だけによれば、“先縄文文化”問題は混迷状態だったいってよいだろう。

それで私に与えられた課題は、モヴィウス先生の研究室に山積していた文献を読んで、わけのわかるようなレポートにまとめなさいということだった。そして、もし必要な文献や質問があったらこの人に連絡すればよいと言ってくださったのは明治大学の杉原荘介先生のお名前と住所だった。ご指示に従ってお手紙をだしてみたら、返事を下さったのは、当時大学院博士課程の最終段階におられた芹沢長介氏だった。この書面には残念なことに日付がはいっていないが、内容から推してはじめていただいたお手紙にちがいない。“お手紙昨日拝見しました。日本の無土器文化がアメリカでも問題にされていると言うこと、噂にきいていました”ではじまり、“モヴィウス教授に出す論文にはできるだけお手伝いしますから、どしどし質問をお送りください”と親切にいってくださった。お言葉どおりに文献や写真を提供していただいて、私のレポートは無事に仕上がった。モヴィウス先生に提出したら、大変満足されたようで、出版することをすすめられた。その件の以後の展開については次回でおはなしするが、この特殊購読コースが私の日本旧石器文化とのお付き合いのはじまりだ。ただしこの時点では日本旧石器文化が私キャリアーの焦点になるとはぜんぜん念頭になかった。2年目の春学期を無事に終えて夏休みにはいったのでクラスメートたちとアラン・ブライアンのステーション・ワゴンに乗りこんで、西海岸のプリースト・ラピッズでの発掘をめざして大陸横断の旅に出発した。

略歴

1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等女学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学（ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】）修士（人類学）
1958年	ラドクリフ大学　博士課程終了（人類学） 1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科　非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科　非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科　専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサーヴィス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葭子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 172

長登銅山跡 ～山口県美祢市～

山根　謙二

私が調査を行なっている長登銅山跡を紹介する。美祢市には日本最大級のカルスト台地の秋吉台、日本屈指の大鍾乳洞の秋芳洞という大観光地がある。長登銅山跡はこれらに見劣りしないものだと、胸を張って言える。

長登銅山跡は東大寺の大仏の原料銅を送った銅山として著名である。長登地区には「奈良の大仏に銅を送ったので奈良登といっていたが、いつしか訛って長登になった」という地名伝承があった。昭和30年代まで稼働していた近代の銅山があったものの、その地名伝承は信憑性がないものとされてきた。だが、長登の山中で須恵器が表採され、昭和50年代から小規模な発掘調査が行われるなど、伝承の検証の動きがはじまった。昭和63年、東大寺の創建時の大仏の原料銅が長登銅山産だと判明し、テレビではトップニュース、新聞では一面で取り上げられ、長登銅山跡が一躍有名となった。これは、東大寺の発掘調査で出土した銅塊と長登銅山跡出土「からみ」（銅製錬滓）の分析によるものであった。これにより地名伝承が検証され、美東町（当時）による発掘調査が平成10年度まで行われた。

この調査の成果は枚挙に暇がない。古代の銅製錬炉はもちろん、木簡や木製品が多く含まれる大溝の検出、銅製錬関係遺物や官衙的性格の遺物の出土など、膨大な発見があった。また、発掘調査だけでなく坑道調査も行われた。すると、中から須恵器が発見され、古代に開発された坑道も残っていることが明らかとなった。こうして長登銅山跡は現存する日本最古の国営銅山と判明し、平成15年に国史跡に指定された。そして、活用の動きも高まり、平成20年にガイダンス施設の長登銅山文化交流館（大仏ミュージアム）が完成した。平成27年には美祢市全域がMine秋吉台ジオパークとして日本ジオパークに認定され、長登銅山跡も主要なジオサイトとして再注目されることとなった。

そして現在、私は平成28年度から発掘調査を担当している。まだ判明していない官衙施設を検出し、整備基本計画を策定するためで、今年度も実施する。発掘調査を行なうと、フェイバレットではなく嫌いになりそうな時もあった。まずは調査に至るまでである。この調査は既往調査から15年以上経過し、合併して新市となり初めての発掘調査であった。そのため、発掘調査関係事務体制を今現在に即した形で一から構築する必要があった。当時は市役所に入庁して3年目だったが、恥ずかしながら雲をつかむように思え、頭を悩ませた。関連法令を確認しながら市役所関係課、県内他市や県に初歩的な質問をし、課内で何度も協議をして、なんとか発掘調査にこぎつけたときは安堵したものである。しかし、その安堵もすぐ別の不安に変わった。地下水が豊富なため木製品を良好に残す土は粘性が非常に高く、人力の掘り下げや手箕での運搬の障害となった。作業員さんはみな毎日泥塗れであった。逆に多量の「からみ」からなる層を掘り下げることもあり、つるはしを使わざるを得ないほどであった。しかもその中から曲物など重要な遺物が出土するのである。土層堆積状況も複雑で、調査のある日は毎日悩んでいた。

それでも長登銅山跡をフェイバレット・サイトとして紹介したいのは、次の2点による。1点目は日本史だけでなく地球史まで学べることである。冒頭に秋吉台に触れているが、秋吉台と長登銅山跡は不可分である。秋吉台は石灰岩からなる。この石灰岩はもともと約3億5千年前から約2億5千万年前に赤道直下でできた珊瑚礁であった。そして、約8千万年かけて海洋プレートにのって大陸縁辺まで運ばれた。この石灰岩は様々な岩と混ざりながら、海洋プレートが大陸プレートの下に沈みこむ際に大陸に付加された。これらの岩は「付加体」と呼ばれ、日本列島の骨格を作っている。また、約1億年前にはプレートの沈み込みによるマグマ活動が活発となった。すると、マグマに熱せられた地下水とその石灰岩が反応し、銅や銀の鉱床ができた。その鉱床を利用した銅山の一つが長登銅山である。長登銅山文化交流館では実際の鉱物を展示し、このメカニズムの詳細な説明がなされている。また、要予約のガイド付ではあるが、残存している坑道に入ることもできる。この坑道は鍾乳洞を利用して銅を採掘したもので、坑道の石灰岩内に緑青を観察することができる。

2点目は長登銅山文化交流館の体験メニューやイベントである。その一つがメダル鋳造体験である（写真参照・要予約）。使用する金属は錫だが、鋳型に自分でデザインを彫り、世界に一つだけのメダルを作成できる。また、10月最終日曜は「銅山まつり」が開催され、発掘調査成果を元に作られた炉で銅製錬実験を行い（写真参照）、参加者は鞴踏みも体験できる。このように長登銅山跡を体験しながら学べる独自のメニューやイベントを実施している。このようなことを行なっているところは少ないのではないだろうか。詳しくは長登銅山文化交流館のホームページを確認してほしい。

なお、当初より長登銅山跡を調査し、このような誇れる体制を築いた前任者たちの情熱や活躍には頭が下がる思いで、まだ私など遠く及ばない。今後は前任者たちに負けないよう、発掘調査はもちろん、更なる活用方法を考え、長登銅山跡をさらにすばらしいものにしていきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中里伸明さんです。

▲銅山まつり（銅製錬実験）

▲鋳造体験（鋳型に錫を流し込む）

考古学者の書棚

「文化財保存科学ノート」

沢田正昭著／近未来社(1997)　大本　朋弥

「保存科学」。埋蔵文化財に携わる人間として、遺跡の発掘調査から整理報告、そして展示保管の仕事に就いている限り切っても切り離せない分野だということは、みなさまご存じのことと思います。古墳をはじめとする墓地はもちろん、集落遺跡でも鉄製品をはじめとする金属製品は多数出土し、低地の遺跡ではしばしば木製品と接する機会があります。これらの脆弱遺物に出会ったことのない方はいないのではないでしょうか。

しかし、学生時代に縄文土器ばかり追いかけ、発掘調査現場でも土器・石器としか出会うことのなかった私には、最近までとても縁遠いジャンルでした。当時の私の認識は無邪気なもので、「遺跡から出土するものは磨滅などで脆くなってはいるけれど、樹脂で強化さえすればなんとかなる」と遺物全般について考えていました。博物館で見る保存処理後の金属製品や木製品の出土環境や来歴を深く考えることも少なかったように思います。

このような認識が誤りだと理解することになったのは、就職して最初の発掘調査でした。ジュクジュクとした粘土層を掘削していたところ、地面から筍が伸びるように柱根がいくつも顔を出し、次から次へと木製品が出土する日が続きました。考えもしていなかったことに理解が追い付かないまま、絶対に乾かしてはいけないと教えられ、必死に駈けずり回ったことを覚えています。

ただ、その経験を経て、保存科学という分野を強く意識するようになった…かというと、恥ずかしながらそのような殊勝な人間でもなく、「木製品は乾かさない、金属製品は乾かす」という漠然とした知識を身に着けるにとどまっていました。

そんな状態が何年か続いていましたが、予期せず保存処理の担当となり、基礎だけでなく実践に至るまでなるべく早く勉強しなければと手に取ったのが本書でした。体系的な予備知識を持たない私を導いてくれるかのように、必要とする順に保存科学について記した構成となっています。

第１章　保存科学の黎明
第２章　保存科学の研究方法
第３章　木製遺物の保存処理
第４章　金属製遺物の保存処理
第５章　遺構の保存処理
第６章　石造文化財の保存処理

まず、第1章では「文化財」「保存科学」という名称そのものの成り立ちからはじまり、日本で保存科学が誕生する契機となった法隆寺金堂壁画保存事業とその後の文化財保存修復の流れを辿ることで、天然材料(でんぷん糊・ふのり)と科学材料(合成樹脂)をめぐる議論がなされたこと、その後も合成樹脂の改良が重ねられ、使用が拡大されてきたことが簡潔にまとめられています。そしてその歴史を通して、両者は対立項では無く、双方の長所を引き出すことの重要さがたびたび提起され、文化財の調査や修理のために自然科学的手法を応用する研究分野としてある保存科学のあり方を強く意識させられます。

第2章では、文化財の保存修理および調査研究に不可欠となる種々の分析方法(蛍光X線分析・X線ラジオグラフィ・赤外線ビデオカメラなど)について、その原理や分析作業における注意点が項目別にまとめられています。また、保存環境調査・保存修復方法・壁画の顔料と壁土の構造など、多岐にわたる保存科学研究についても知ることのできる内容です。

保存処理をするための事前調査や整理報告作業に伴い、これらの機器を否応なく扱わなければならない状況にあった私にとって、作業と並行しながら次のステップへ進むことの助けとなりました。

そして、いよいよ第3章からは木製品・金属製品・遺構・石造物への保存処理技術の理論と方法について歩を進めます。

特に重宝したのが木製品に関する内容でした。劣化指標となる含水率や出土木材の理化学的性質と、18世紀よりヨーロッパではじまり、発展してきた各種保存処理法の変遷をもとに、①表面張力を抑えることで変形を抑制する、②樹脂を使用して変形しないように補強するという基本的な原理について明快に説明しています。そのうえで、PEG(ポリエチレングリコール)法・真空凍結乾燥法・高級アルコール法などの各種保存処理技術と実施上の留意点について書かれており、実際の作業についてイメージが乏しい方でもわかる細かな配慮が随所に垣間見えます。

兵庫県でも量の多寡はありますが、発掘調査で木製品が出土しない年はなく、多数の木製品が今も保存処理を待っています。このため、本書から実際の処理における遺物の劣化度合いの観察方法と含浸計画の策定を学び、それをベースに適切な処理を求めた試行錯誤の毎日を送ることができたのだと思います。

本書が編まれてすでに20年の時が経ち、その間にも保存科学という分野は急速に研究が進み、新しい手法がいくつも開発されているのも事実です。しかし、研究が深まり細分化が進むにつれて、初学者はどこから手を付ければいいのかわからなくなってしまうのではないでしょうか。脆弱遺物に触れる機会の多い我々文化財担当職員にとって、保存科学という広い世界に触れるにあたって、その根幹をしっかり学ぶことができるテキストとしてご一読されることをお勧めいたします。

アルカ通信　No.179
発行日　2018年8月1日
企　画　角張淳一(故人)
発行所　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp